

宮永姉妹が双子で清澄に入学したら

ありきたり

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

小説タイトルに書いたある通り、もしも照と咲が双子で清澄高校に入学したらという話です

能力やルールは原作と同じでいきます

目次

始動！	1
合宿！	4
長野予選前日！	7
予選①	10
そしていよいよ！	13
決勝戦①	16
先鋒戦 前半	20
先鋒戦 休憩室	26

始動！

照「咲、学校遅れる…」

咲「ごめん、お姉ちゃん」

照「大丈夫：まだ間に合う」

入学初日から、遅刻気味の双子の咲と照は
とても仲が良いと有名だった。

そして何より…

中学生にして、麻雀最強コンビとして

全国で知らない人はいないほどに

そんな2人が無名の清澄に入学したのだ

久「どうして、うちを選んだの？全国からスカウトされてたでしょうに？」

照「理由は簡単…」

咲「原村さんとまた打つためなんです！」

久「和と？」

コクリ

照「私達を相手に飛ばない相手は貴重…」

まこ「たいした自信じゃの」

優希「でも、実際つよすぎるじえー！」

まこ「確かにの、今のところ飛んでないのは部長と和だけじゃ」

和「そんなこと言われたって嬉しくありません！私達も流すのが精一杯です！」

久「しかも、私と和でコンビ打ちしてるっていうのにな」

久（とんでもない、化物が入って来ちゃったな！

しかも2人も）

咲「でも、びつくりだよ！原村さん以外に飛ばない人がいるなんて！」

照「高校はとても楽しめそう…」

久（これは本当に全国優勝狙えるかも！）

照「それにしても、清澄のレベルが高くてびっくりした」

咲「だよね！部長とか、個人で全国大会行ってもおかしくないのに」

まこ「部長については同感じゃあ」

久「そんなに持ち上げて何も出ないわよ？」

優希「でも、嬉しそうじゃええ！」

久「そんなことより、咲達から見て私達の実力はどれくらいなの？
具体的なのが欲しいのだけど」

照「去年の長野決勝ぐらいだと思う…」

咲「でも、伸びしろは去年の決勝の4校に比べて、3倍近くあると思います！みなさんの能力は強力な上に弱点も分かりやすいですから」

久「是非聞きたいわね」

咲「と言つても、部長は特にないですよ？部長はすでに全国レベルの力の持ち主ですので」

久「ありがとうと言っておくわ

なら優希からおしえてちょうだい」

咲「分かりました」

照「東場で能力発動時、鳴きで流れが止められやすい

鳴かれても調子が狂わないように調整すればいいだけ…」

咲「あとは、点数計算と南場をどうしのぐかというところだね」

優希「了解じゃええ」

照「まこ先輩は、初心者に弱い！その幅を広げればそうは負けない」

咲「原村さんは、変なミスが目立っている

ネット麻雀の時の【のどつち】とは大違いだから、同じ環境を作るためにぬいぐるみを抱いて打つだけで大丈夫」

和「そんなこと、恥ずかしい！」

久「和、これも強くなるためよ」

和「分かりました、やれば良いんでしょう」

全員（意外とすんなり受け入れたな）

久「それじゃあ、弱点克服にむけて合宿しましょうか！」

優希「言うと思ったじゃえ…、しかし賛成だじゃえ」

まこ「わしもじゃ」

和「仕方ないですね、私も賛成です」

久「意見も一致したところで、出発は明後日だから用意忘れないように！」

照・咲「私達の意見は聞かないんかい！」

合宿!

久「着いたわよ」

優希「早く入るじよ」

まこ「あんたは少し落ち着きんしゃい」

咲「合宿なんて初めてだね、お姉ちゃん」

照「楽しみだね、咲」

ゾロゾロ

?「あのく、ちよつといいですか?」

久「ん?どうしたの?」

?「俺って、染谷先輩のために呼ばれてるんですよね?」

久「そうだけど:どうかした?」

?「頼まれた身の俺がどうして荷物持ちを!」

咲「何か文句があるの?京ちゃん:」ニコツ

京太郎「いえ!何もありません!!」ゾクツ

照(我が妹ながら、相変わらずドSだな)

須賀京太郎、幼馴染にして下僕なのだ

しかし、今回に関しては咲が正しかった

咲「だいたい、女の子に荷物持たせる気だったの?」

ギクツ

照「:ハッ」

京太郎「照さんなんかキャラ変わってません!?優希助けて」

優希「今回は京太郎が悪いじえ」

京太郎「優希く」

咲「分かったら、さっさと歩く!グダグダしない!」

京太郎「はーい」

ドタドタ

久「:須賀君も大変そうね、色々と」

まこ「そうじやのう」

久「それじゃ早速、始めていききたいと思います」

全員「はい」

久「咲と照はみんなの指導をしながらやってほしい」

咲「課題とかはないんですか？」

久「2人に課題とかあるのか逆に聞きたいわよ」

まこ「そうじゃ、そうじゃ」

久「次に和、あなたはペンギンを抱いて打つことに慣れることね
和「分かりました…」

久「優希は、咲達にコーチされるとともに計算ドリルをやりなさい」

優希「ええー、計算は苦手だよ」

久「いい？どんなに強い打ち手でも、点数計算がすぐに出来ないのなら、判断力が鈍るし、安定した麻雀が出来ないわよね？」

優希「それはわかってるじよ」

久「そんな選手を使うのなら、1番自由に打てる先鋒しかいないのだけど、咲と照がいるからそれは無理…、つまりこのままだとあなたのレギュラー入りは絶望的なのよ」

優希「…頑張るしかないじよ」

久「期待しているわ、さいごにまこ」

まこ「須賀君と打ちまくるのと、初心者牌譜をみることじゃろ？」

久「高校時代の小鍛冶プロとかみるといいわ」

まこ「麻雀始めた1年までインハイチャンピオンじゃからの、確かにあの人を見とれば動揺は少なく済みそうじゃ」

では、そういうことで解散！

そして、夕方

京太郎「もう、無理…」パタン

優希「京太郎がついに気絶したじよ」

まこ「一日中ずっと、焼き鳥状態だったからのう」

久「それじゃあ、私達もそろそろ寝るとしますか！」

全員「賛成ー！」

そして、朝

京太郎「ん？あれ…そうか昨日あのまま気絶して
ふと前を見るとそこには

咲「大変ですよ、いま京ちゃんの頭の中で卑猥な辱めを受けています、姉様が」

照「大変だわ、いま京太郎君の頭の中で恥辱の限りを受けているのよ、咲が」

京太郎「アニメのセリフで遊んでんじやねー！」

長野予選前日！

久「みんな集合！」

まこ「何についてかは分かっとなるがのう」

久「そうね、いよいよ明日から長野予選が始まる訳だけど一致団結して頑張りましょう！」

優希「当たり前だじえ」

久「レギュラーの発表なんだけど…、優希…」

優希「分かってるじえ、まだ点数計算に時間がかかるし覚悟はしているじよ」

久「なので、次鋒はまこでいきます」

優希「染谷先輩！私の分も頑張ってくださいだじよ」

まこ「もちろんじや！」

久「なーに甘い事言ってるの」

優希「じよ？」

久「決勝までは、先鋒は優希で行くつもりよ？」

優希「え？どうしてだ？」

久「いい、周りの高校は、うちには和しかいえないと思っているけどそうじゃないわよね？」

まこ「化物が2人もいるからのう」

久「そう、咲と照はうちの切り札、切り札はあまり簡単に見せるものじゃない」

まこ「しかし、この2人に対して対策を立てれるとは思えんのじやが？」

久「それは私も同意見だわ、でも知っているのと知っていないのは大きく違う」

照「…なるほど、狙いは相手の動揺」

久「そういうこと」

優希「どういうことだ？」

咲「つまり、原村さんはデジタルの化身だから対策を立てたとしても大差で勝つことは難しいし、たいした対策も立てれない」

照「となると、次に考えてくることは？」

優希「他のポジションの所で取りに行く…か？」

久「そういうこと！そこに照や咲が出てきたら相手は間違いなく動揺してリズムが崩れる、もっと確実に勝てるってわけ」

まこ「てことは、決勝までは副将までで終わらせるって言うことかの？」

久「そういうこと」

優希「そんな簡単に出来ることじゃないじよ」

久「私はそれくらい力はあると思うけど？」

まこ「それは褒め過ぎじゃあ」

久「きついこと言ううだけど、出来ないのなら全国ではまともに戦えないと思うわ、全国制覇なんて到底無理ね」

まこ「全国制覇とか、本気か？」

久「当たり前でしょ？」

まこ「ならやるしかないのう、裏を返せば終わらせることが出来るのなら全国でもまともに戦えるってことじゃ」

優希「気合い入れて行くじえー！」

久「だからあなた達2人は、迎えが来るまで近くのホテルに待機しててね、一步も出ちゃだめよ、顔は有名人なんだから」

照「分かった、でも連絡くれれば、自分達で行ける」

久「あなた達は迷子になるでしょ？」

和「私も同感です」

優希「いまだにたまに学校で迷子になってるもんな」

まこ「究極の方向音痴のふたりじゃからのう」

照「…悔しいけど言い返せない」

咲「諦めよう、お姉ちゃん」

久「話がまとまったところでオーダーを発表するわ！」

先鋒、片岡優希

次鋒、染谷まこ

中堅、竹井久

副将、原村和

大将、寺平彩乃

優希「寺平彩乃って、学生議公会会計のか？」

久「片方でも名前入れてたら、ネタバレになっちゃうでしょう？」

まこ「学生議公会会長の権力か？」

久「人望って言って欲しいわね、名前書くだけってことでおっけー貰えたのよ」

まこ「これで後には引けんのう」

久「そういう事、そして決勝のオーダーが」

先鋒、宮永照

次鋒、染谷まこ

中堅、竹井久

副将、原村和

大将、宮永咲

咲「私が大将？お姉ちゃんの方が良いんじゃない？」

照「私の能力じゃ大将はきつい」

久「連続和了の能力が、大将じゃ弱点になりかねないもんね」

まこ「2人の能力は先鋒向けと、大将向けとはつきりしとるじやろうに…」

優希「逆に中学の時はどんなオーダーで、出場してたんだ？」

咲「お姉ちゃんが先鋒で私が次鋒、お姉ちゃんが飛ばし損ねても私が次だからすぐに飛ばすっていうオーダー」

まこ「…相手さん、トラウマじやろうね」

優希「咲ちゃんも、役満和了で終わらせてそうだよ」

咲「優希ちゃん、どうして分かるの？すごい」

照「確かに、終わった時みんな死んだ魚の目をしてたけど、そういうことだったのかな」

和「悪意なくそこまでやれるって…」

久・まこ・優希・和（生まれながらの魔王なんだろうな）

予選①

久「いよいよね！」

優希「それじゃあ行ってくるじえ！」

久「1人で終わらせても良いのよ？」

優希「それはいくらなんでもきついじよ」

咲「なに言ってるの？誰が鍛えたと思ってるの？」ギロツ

まこ「咲の鍛え方はえげつなかったからのう」

優希「確かに咲ちゃんのおかげで以前とは格段に強くなったとは思
うけど、10万点はきついんじゃない？」

照「：自信がないんだね、でも咲は無理なことは言わない」

咲「そういうこと、頑張つてね優希ちゃん！」

まこ「これは出来なかった時が、もっと厳しい特訓が待ってそう
じやのう」

優希「い：行ってくるじえー！」バタバタ

久「咲、ほんとに出来ると思ってるの？」

咲「今の優希ちゃんならあの程度の相手、5・6割の力で出来ます
よ？それくらいには鍛えたつもりです」

久「にしても、ビデオカメラ越しでも迫力が伝わってきてたわよ？
ここにいるみたいだった」

まこ「ほんまじや、ちよつと怖かったしのう」

咲「私が怖い？可愛いの間違いでしょ？」ニコッ

久・まこ「：」ゾクッ

照「：試合始まる」

長野県予選1回戦

清澄

千曲東

今宮女子

東福寺

先鋒

東 片岡優希

南 土屋由理（千曲東）

西 門松葉子（今宮女子）

北 永森和子（東福寺）

優希（とりあえず、いけるとここまで行くじょ！）「ダブルリーチだ
じえ」

土屋「いきなりダブルリー…こんなん読めるわけないし、普通に…」

優希「ロン！親っぱね！」

土屋「ダブルリーでその手牌…、化け物か？」

清澄 118000

千曲東 82000

今宮女子 100000

東福寺 100000

優希（なんだか、調子が良いじょ！）

門松（ただのまぐれだろ）

優希「それだ！ロン、24300！」

葉子「ば…倍満だとー！」

永森「なんなの、この子…やばすぎるよ」

清澄 142300

千曲東 82000

今宮女子 75700

東福寺 100000

その後も優希が上がり続けて…

実況「きまつたー！なんと清澄高校の片岡優希、東二局に回すこと
なく終わらせたー！」

1位清澄 372800

2位今宮女子 19800

3位東福寺 11000

4位千曲東 3600

優希「帰ったじえ！」

まこ「おつかれ」

久「東一局で終わらせるなんて、やるじゃない」

まこ「出来過ぎじゃあ」

優希「やはり、我最強！我ながら天才だよ」

照「：おめでどう、次も頑張って」

優希「おう！」

咲「優希ちゃん、おめでどう」

優希「ありがとうだよ！」

咲「でも、東一局なんでダブリーかけたのかな？あの手牌ならダブリーしない方が最低でも倍満になっていたはずだけど？」

優希「あの時は緊張で混乱してて思わずリーチしちゃったんだじよ、でも次は最初から飛ばしていくじえ」

咲「他にも調子に乗って無理に高目狙いに行って振り込みそうになった場面もあったけど？」

優希「うっ」

咲「次あんな生ぬるい打ち方したら、私とお姉ちゃんと部長と優希ちゃん徹夜で麻雀しようね！」

まこ「おい！それって…」

和「下手すると永遠に狂人になりますね、良くても一生麻雀は出来ないかと…」

優希「もう手を抜かないって約束するからそれだけは勘弁して欲しいじよ！」

久（咲って普段は優しくくて大人しくて良い子なんだけど、麻雀のこ
とになるとほんとに…）

咲以外（鬼っていうより、魔王だよな）

そっすいよいよー!

アナウンス「ただいまより、長野県予選準決勝を始めます」

優希「それじゃあ、行ってくるじえ」

久「相手を舐めちやダメよ?」

優希「わかってるじえ」

咲「優希ちゃんの仕事は相手校を最低でも四万点ずつ削ること」

久「相手校もマークしてくるからしつかりね」

優希「おう!任しとけ!」

咲「期待してるからね」ギロツ

優希「い…いってくるじよー」

和「咲さんって、優希に厳しいですよね」

まこ「厳し過ぎじゃあ」

照「たぶん…かわいいんだと思う」

和「え?」

照「今まで咲が指導してついてこれるのはいなかったから、優希ちゃんがきつと初めて」

まこ「普通逃げ出すしもう」

照「だから、咲はひとりぼっちだった…」

和「でも、咲さんがスパルタなのは本当に勝ってほしいからなのでは?」

照「うん…やっと出会えたんだと思う、本気でついてきてくれる人に、そして向き合ってくれる仲間たちに…、私も含めて清澄にきて良かった」

咲「お姉ちゃん、喋り過ぎだよ?なに人の黒歴史バラしてんの?ひとりぼっちとか」

照「え?いや…その」

咲「どうしたの?」

照「ごめんなさい…」シュン

咲「はい、分かればよし!お菓子でも食べながら試合観よ!」

照「うん!」パアア

和「この姉妹…」

久「どっちがお姉ちゃんだか、分からなくなるわ」

優希「ツモ！4000・8000」

アナウンス「清澄の片岡優希選手、4度目の倍満ツモ！早くも相手を引き離したー！」

優希「南場はとにかくしのぐじよ」

アナウンス「先鋒戦終局！片岡優希選手、相手を近寄せず見事相手校から約四万点ずつ削り取ったー！」

優希「なんとか役目果たせたじえ、でもこれじゃあ咲ちゃんに怒られちゃうじよ」

ガチャ

優希「今、帰ったじえ」ガタガタ

咲「優希ちゃん…、さつきな麻雀…」

優希「ヒツ」

咲「とつても良かったよ！結構厳しめにノルマ設定してたんだけど、凄いよ！」

優希「ほんとか？」パアア

咲「あとは南場の所の…」ゴニヨゴニヨ

優希「ということは…」ゴニヨゴニヨ

和「咲さんは、本当に麻雀が好きなんですわね…」

咲「へ？」

和「い…いえ」カアア

久「まこ、しっかりね」

まこ「おう！任しときんしゃい」

アナウンス「きまつたー！染谷まこ選手、相手が無理して高めを狙ったところに跳直炸裂！清澄高校、中堅に回すことなく決勝進出を決めましたー！」

まこ「ただいまじゃ」

久「一校を狙い撃ちなんてかわいそうじゃない」クスクス

まこ「わしには見逃す余裕はないからのう、取れるやつから取った
らこうなつたんじゃ」

久「明日、いよいよ決勝ね！」

まこ「そうじゃのう」

優希「咲ちゃん、照ちゃん、あとは頼んだじえ」

咲「うん！わかった」

照「…全力を尽くす」

久（みんな驚くでしょうね）

和「どうか、2人の機嫌が悪くなりませんように」

まこ「悪くなつたら、機嫌を損ねた相手がトラウマを抱える以上の
ことになるか…」

優希「地球の最後の日になるかだよ…」

決勝戦①

実況「いよいよこの日がやってきた！果たしてどの高校が、全国への切符を掴むのでしょうか！今日は解説に藤田プロをお呼びします」

藤田「よろしく」

実況「本日の決勝戦は去年の優勝校の龍門渚、名門風越、全くの無名ながらここまで上がって来た清澄と鶴賀学園となっています。」

藤田「清澄は、後ろ3人が出てないだけに未知数だな」

実況「藤田プロは、注目している選手はいますか？」

藤田「…龍門渚高校の天江衣」

実況「去年、全国でも大暴れでしたからね」

藤田「他の4人も力を持っているしな、去年全国ベスト8の力は本物だ」

実況「では、他の三校は大将の前に点数をより稼がなければならぬということですか？」

藤田「そうなるな、どの場面で取りに行くかが勝負の分かれ目になるだろうな」

実況「それを踏まえて、先鋒戦の注目はどこでしょう」

藤田「清澄の片岡優希がどこまで通用するかだな、清澄はこれまで彼女が稼ぎまくってるからな、清澄にとって彼女が稼げなかったらきついだろう」

清澄高校控え室

久「ここまで上手いくとはね笑」

優希「全く、咲ちゃん達がいるって気づいてなかったな」

まこ「実況が気づいてないということとは…」

久「相手もまだ知らないでしょうね、ところで張本人の咲と照は？」

優希「散歩に行くって行ってたじよ」

久とまこはゾツとした、それは2人が極度の方向音痴なことを知ってるから…、頭の中で【棄権】の二文字がよぎった

優希「ちゃんと和ちゃんが付いて行ったから大丈夫だじよ！」

久「それなら、迷子にはならないわね」
まこ「でも多分、2人の目的は…」
久「相手がどの程度の相手なのか見に行つたんでしようね」
まこ「強いなら、楽しみながら潰すだろうし」
優希「弱いなら、容赦もなくさっさと終わらせると思うじよ」
久「敵じゃなくて良かったわ…」

一階の廊下

照「意外と楽しめそう…」

咲「風越の福路さん？」

照「うん：あの人なら私の連続和了止めてくれるかも」

咲「一方的過ぎたら、面白くないからね！ちよつとは逆らつてくれなきや」

照「そうだね」

和（もう嫌だこの人達…、会話が怖い）

その時、目の前を2人の金髪の子が横切つた

？「衣、待つてくださいまし」

衣「どうかー、はやくはやくー」

透華「全く仕方ないですわね」

タツタツタツ

照「…」

咲「…へえ」

和「？、どうしました？」

咲「いや…、お姉ちゃん！私は飽きずに済みそうだし楽しみが増えたかも」

照「龍門洩透華…：本人は気づいていないがもう1人の龍門洩透華が今日は目を覚ますかもな」

咲「いつか、戦りたいね！お姉ちゃん!!」

照「そうだね」

2人がにこやかに話していた時、和は泣きそうな顔で…

和「私の相手じゃないですか！どうやったら楽しめるんですか！不安しかないです!!」

普通は和の反応は当たり前なのだが残念ながら、咲と照は普通じゃない

咲「あんなに強い人とできるんだよ！楽しい以外に何があるの？」

照「簡単に勝っても、楽しくない……でしよ？」

和「……」

不思議そうに和を見つめる2人を見て、和は反論するのを諦めた

実況室

実況「おっと！ここで選手交代のお知らせが入って来ました！」

藤田「風越か？今の5人がベストメンバーと聞いていたが……」

実況「いえ、その清澄なんですけど……」

藤田「どうした、そんな驚いた顔をして」

実況「いや……先鋒の片岡優希選手と大将の寺平彩乃選手の2人が、かわって」

藤田「なに!?!それは痛いな、よりにもよって重要ポジションに置かれている2人がでれなくなるとは」

実況「それが……先鋒に宮永照、大将に宮永咲が入ると……」

藤田「は？それって……あの宮永姉妹か？」

実況「おそらく……」

藤田「やってくれたな、清澄は」

実況「しかし、数々の強豪校からの誘いを断っていたのでやめたと思われていたのですが」

藤田「隠し玉はよくあることだが……これは反則級だろ！隠し玉が宮永姉妹って、これ考えたやつ絶対性格悪いぞ！」

実況「凄いことになってきました、改めて藤田プロ！見所は！」

藤田「宮永照相手に他の三校はどう対策を立ててくるのか！そして宮永咲は天江衣相手でも、いつもの魔王っぷりを見せれるのか！」

実況「1時間後に先鋒戦が始まります！お見逃しなく！」

清澄高校控え室

優希「どこもかしこも、大騒ぎだしえ」

まこ「しかし、プロも認めてるとはすごいのう」

久「そうね、咲にしては魔王扱いだったもんね」

まこ「どんなことをすれば、プロに魔王なんて言わせれるのじやろうか？」

優希・久・まこ「…」

久「想像しただけで、恐ろしいわね…」

まこ「もしも、敵だったとしたら…」

優希「ひえっ…」

(味方で良かった)

先鋒戦 前半

照「じゃあ、行ってくる…」

咲「頑張つて！お姉ちゃん」

まこ「わしやあ、何も心配しとらんがのう…」

和「逆に相手が壊されないか心配ですね…」

久「壊さない程度に、頑張つてね！」

照「壊す…？よく分からないけど全力を尽くす」

和（やっぱり、咲さんのお姉さんですね…）

風越控え室

池田「にやあああ…」

吉留「キャプテン…」

福路「大丈夫よ！みんな、顔を上げて？勝負する前からそんなじゃとても勝てないわよ？」

池田「しかし！まさか宮永姉妹が出てくるなんて…」

吉留（華菜ちゃんが怯えてる…）

コーチ「池田ア！何だその怯えた態度は？そんな状態で勝てると思つてんのか？おい！」

池田「ひっ！」

コーチ「はあ…、確かにあの姉妹は化け物だ…認めよう。」

吉留「なっ！そんな…」

コーチ「だからと言って、うちが負けると決まったわけではない！全国に行ったらこんな事ザラだ！これぐらいでへこたれてんじやねー！」

池田「コーチ…」

コーチ「福路、宮永照を止めれるとしたらお前だけだろう…」

福路「分かってます、頑張ります！」

池田「キャプテン…！」

福路「大丈夫！だって私は、風越の部長なんだから…」

龍門測控え室

衣「純〜！しつかりやるのだぞー」

純「なんでお前は、そんなに楽しそうなんだ…」

透華「純！分かってますわね…」

純「ああ…、つたく〜！鶴賀をフオローしながらなんて大変すぎるだろ！」

実況室

実況「さあ、間も無く始まります！」

藤田「風越と、龍門測がどう立ち回ってくるか…、鶴賀が持てばいいんだが…」

先鋒戦

東 宮永照

南 津山睦月

西 福路美穂子

北 井上純

東一局

親、宮永照

純（宮永が起家なのは、ラッキーだな）

福路（何としても、上がる）カツ

純（風越…、やっぱり目開くか）

津山「…うむ」

宮永「…」

純（出来れば、宮永に直撃食らわしたいところやけど）

福路「リーチ！」

純「なっ！こんなん分かんねえって」

福路「ロン！リーチ、一発、タンヤオ、対々和、ドラ3で倍満です」

純「ちっ！やられた！」（3巡目でこの手かよ）

福路（さあ！これからね！）

その瞬間、照以外の3人の寒気が！思わず3人とも背筋を伸ばす

福路（これが、照魔鏡…）
純（いよいよやな）

清澄控え室

咲「風越の人、すごいね」

まこ「さすが、名門風越の部長じゃ」

優希「でもこれじゃあ、照ちゃんが…」

咲「本気にはならないと思うけど、いつもよりかは本気になるかな？」

久「てことは？」

咲「ロケットスタート確定」

東二局

親、津山睦月

純（データ通りなら、最初は1000点からか…）

福路（嫌な予感がする）

照「…ふふっ」ゴツッ

純（なんだこの空気は!?!?衣とする時に似ている）

福路（去年の天江さんより、ひどいかしら?）

純（配牌は悪くない、鳴きの速攻!）

福路（点数は安いはずだし、この局は諦めましょう）

津山（部長に言われた通りに、私はひたすら降りる!）

2巡目

純「チー」タンツ

3巡目

純「ポンっ」タンツ

純（よし!これで一向聴）タンツ

照「…ロン、1000点」

福路（早い…）

純（早すぎるだろ!）

東3局

親、福路美穂子

照「ツモ、1200・2300」

純「別に細かく上昇するってわけやないんやな」

福路「それにしても、また3巡目…」

東4局

親、井上純

照「ツモ、2000・4000」

実況「またもや、宮永照く！怒涛の3連続和了！」

純「たった5巡で、満貫かよ」

福路「予想はしてたけれど、とんでもない化け物ね…」

純「どつちにしろ…」

福路・純「流す！」

南1局

親、宮永照

福路「次は、跳満以上の手のはず」

純「とにかく、スピード重視でやりたいんだけど鳴けない！」

福路「とにかく私も全力を出さなきゃ！みんなのために！」カツツ

純「風越も片目あげやがった、なんとかしてこの流れを変えたいんだが…」

7巡目

照「ツモ、純チャン、清一で8000オール…」

福路（ダメっ！このままじゃ…）

純（くそっ！どうすれば…）

南1局一本場

8巡目

照「カンツ」

福路「宮永さんは、テンパイしてるはず…嫌な予感」

照「もう一個カンツ…、ツモ…清一、三暗刻、嶺上開花、ドラ3、16000オール」

実況「か…数え役満！だれも止められないーい」

福路（そんな…）

清澄高校控え室

久「うわー、やりたい放題ね」

優希「すごいじよ！って、咲ちゃん？…」

咲「お姉ちゃん、…嶺上開花は私の専売特許!!？」ゴツツ

和「咲さん、落ち着いてください！」

咲「これが、落ち着いてられるとでも？」ゴゴゴツ

久「この子、異常だわ…」

優希「気付くのが遅すぎるじよ！」

まこ「殺気で吐き気がっつ！」

南1局二本場

ピクッ

照「咲、怒ってる…」あわわわわ

福路（あれ？宮永さんから気が感じられなくなった？）

照（やばい、殺される）ゾゾゾツ

福路（行けるっ！）

福路「ロン、12000です！」

実況「あーっと、ここで宮永照が風越に振り込んだー！」

照（…消そうかな）ゴツツ

清澄高校控え室

久「今完全に、自分の不注意で振り込んだのにキレたわよね？」

優希「さすが、咲ちゃんのお姉ちゃんだじよ！理不尽の塊姉妹だ

じえー！」

和「本当にひどすぎです！」

南2局

親、津山睦月

福路（さつきから、宮永さん怖い…）

純「あっ！ロン、12000」

福路「え？」（そつち？）チラッ

照「…」ゴゴゴッ

福路（やっぱ怒ってるよー）

南3局

親、福路美穂子

福路（次こそたぶん、宮永さんが来る…）

純「ロン、12000」

実況「ここで風越が龍門渕に二連続放銃！これは痛い！！」

純（何かおかしい、誰かに後押ししてもらってるような…）

南四局

親、井上純

照「テンパイ」

純「テンパイ」

津山「テンパイ」

福路「ノーテン」

実況「前半戦しゅーりょー！」

藤田「予想通り清澄が2位に十万点近く差を付けたが、南2局から宮永照が静かすぎた…不気味だな」

純「おつかれ」

津山「お疲れ様です」

福路「お疲れ様です」

照「あ！福路さん、落とし物」

福路「え？」

照は福路に近寄って一言

照「後半戦、楽しみにしててね…」ゴッッ

先鋒戦 休憩室

風越女子控え室

池田「キャプテン…！」

池田が心配そうに美穂子に声をかけるが俯いていて顔が見えない、池田は前半戦で照にボコボコにされて落ち込んでいるんだろうと思っていた

美穂子「ねえ、華菜？宮永さんって何年生だっけ？」

池田「1年生ですけど、その…」

美穂子「年上の人に対する姿勢がなっていないわよね、何？後半戦楽しみにしててねって何様のつもりなのかしら」

全員（ブラックモードだった!!）

普段は大人しくて周りに気を使い優しいキャプテン、でもやはりストレスは溜まるらしく、溜まりに溜まって爆発した姿がこのブラックモード

以前この姿になったのは美穂子が2年の時、すでにエースと周りから呼ばれていた美穂子に嫉妬した3年が美穂子に嫌がらせをしていた

しかし美穂子はその嫌がらせに嫌な顔一つしない、それにも3年はムカついていた

ある時3年は美穂子と仲良くしていた当時1年の池田に「いじめられたくないなら、美穂子と仲良くするな」と言ってきた、しかし相手は池田である、断るのは当然「イジメなんて弱い奴がする事だし！」と余計な一言も言ってしまう3年に殴られた、その殴られた現場を美穂子がちやうど見てしまい初めて発動したのだ！

その時は恐ろしい麻雀だった、風越は毎年数人のプロを輩出していた名門で、この年も数名がプロ行きが決まっていたのだが全員が取り消した

心が壊れてしまったからである、もう2度と麻雀に触れることが出来ない体にされてしまったのだ

美穂子「教育が必要ね…、そう思わない？華菜？」

池田「そう思います！そうするべきだと思います!!」

あの池田が標準語になってしまいうくらい恐れられているのだ

普段お人好しで温厚なキャプテン、なのに風越の生徒がきちんとしているのは彼女を怒らせるとやばいって事があったからかもしれない……

清澄高校控え室前

照「ただいま……」

咲「おかえり、お姉ちゃん？」ゴゴゴ

照「咲：許してほしい、嶺上開花使ったの謝るから」ガクガク

咲「別に使ったから怒ってる訳じゃないよ、ただあれわざと点数下げてまで風越の人を狙い撃ちするための嶺上開花だよ？私の嶺上開花を挑発の道具とし使ったんだよね？」

照「許してよ、ああでもしないと本気が見れないんだもん」

咲「……まあ今回は許してあげるよ、本気を出すまで待つだけでなく手伝いをするなんて、私には理解出来ないけどね」

なんとというか会話がカオスすぎる、いつの間に嶺上開花は咲の物になっていたのだろうか

咲と照にはプレイヤーとして大きな違いがある

照は相手に本気を出させてその上で相手を倒すことを麻雀の楽しみとして、まるで異世界ファンタジーのチート主人公のような考え方だ、実際チートレベルの強さなので間違っていないのだが笑笑

咲は本気を出せる出せないも実力の内と考える、というか本気を出さずに完膚無きまでに相手を叩き潰し蹂躪する事を楽しむ究極のサディストだ、歯向かうやつは誰であろうと叩き潰す、まさに魔王と
うか、鬼と
うかラスボス感が凄いのだ

これほどまでにラスボス扱いされたのは咲以外に織田信長くらいなのではないだろうか

中学の時は全部咲が相手を飛ばしていた、1校だけでなく複数校飛ばしが基本だった、それ故に白い目で見られるのは常に咲だった、それが咲よりも照に点数を搾り取られていたとしても常に咲が白い目

で見られる、それは白い目の行き先が照に向かないためというのは明らかだった

照もその事は分かっている、照も自分の可愛い妹が白い目で見られていることに不満しかないだが手を抜くと咲は怒るし傷つく事も分かっている、だから照は決めたのだ、妹より強くなるとそしてその時は次は私が汚れ役をやると

咲は友達に言われた事がある、「どうして汚れ役をやるのか」と

その時咲は「だってそうしたら本気の私を楽しませてくれるプレイヤーに出会えるかもしれないし、お姉ちゃんが本気で私を追い越そうと頑張ってくれるんだもん」といい笑顔で答えた

咲が欲しているのは本気の自分を楽しませてくれる壊れないおもちゃだった